

(13) 読者の声

平成24年(2012年)7月19日(木曜日)

時評

佐藤洋一郎 総合地球環境学
研究所副所長・教授



高校生対象に授業をする機会が増えた。高校生たちからは、研究者になるのはどうすればよいかとの質問を受けることがある。多くの研究者は、この問いに対して「基礎学力をつける」「学校の勉強をしっかり」「など」と答えるようだが、私は必ずしもそうは思わ

ない。特に昨今の教育の現場を垣間見るに、若い人たちにはもっと自然の現象なり社会の現場なり、ともかくバーチャルではないリアルな世界をしっかりととみる力が弱いと感じる。スケッチする、受けた印象を文章に書きとめるなどの

議員の公募

古典的方法で総合的な観察眼と表現の力を磨いてほしいと思う。

むしろ基礎学力も大事であるとの考えに異存はない。環境問題のような、人間活動を含む複雑な現象を扱う学問の場合、好きな分野だけであればよいということにはならず、幅広い知識と、それを縦

政治家にも「訓練」必要

横に組み合わせる総合力が必要になってくる。その上で、

さまざまな経験や長い時間かけて磨かれた感性が、研究者には求められる。初任が30歳近くになるシステムも、そうした事情が関係している。昨日今日のつけ焼き刃では、研究者にはなれない。

もっともこのことはどんな

分野でも同じだろう。その道のプロと言われる人たちは豊かな才能と、長い時間の蓄積の上にさらに訓練を重ねて、

初めてプロとしての地位と名声を勝ち得ている。芸術も、技術も、スポーツも、いや野菜作りも魚を獲る漁師もはたまた職人も、みな同じであるはずだ。そしてその事情は政

治の世界でも変わらないはずである。

ところが最近政治の世界では議員の公募をしばしば耳にする。政治の世界が特殊なのはわからないではない。中には特異な才能の持ち主がい、違つて畑から政治に転身してもすぐに実力を発揮する人もいるかもしれない。

しかし、全国の何千何万という議員やその候補者が皆そうとは到底思われない。国会やまちこちの自治体議会や首長選などで繰り返しおこなわれる候補者公募とそれに応募する人びと。政治経験もなく

初めての応募で見事候補者に採用され、選挙にも勝って政治家になる素人政治家がどんどん出てくる。そうした素人政治家に高い報酬を支払えるほど今の日本は豊かではなくなってきた。

政治家にも、プロとしてやってゆかための訓練は要る。

政党にも公募に応じた人にも、もつ一度プロとは何かを考えてもらいたいと思つし、何より政治家の報酬には、経歴や実績に応じた査定が要るよつに思つ。



◇さとう・よういちろう氏 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2008年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「コシヒカリより美味しい米」(朝日新書)など。